

スタートカリキュラムにおける「学習探検」の意義

二上昌基*・木村吉彦**

(平成26年9月29日受付；平成26年11月4日受理)

要 旨

本稿は「幼児教育の成果を小学校教育に生かす」という保育所から小学校へのつながりを意識し、教科学習への円滑な移行を視点に置いたスタートカリキュラムの実践である学習探検に着目した。「学び」と「交流」の2つの視点をもとに、新入学児童の様子からその効果について検証した。具体的には、小学校2年生との算数、小学校4年生との国語の時間を検証対象とした。「学び」において1年生は、学習姿勢、学習規律の模範を上級生から学んだ。自分たちの学習において実践する姿、課題意識を通して活動に取り組み、課題解決の中で教科学習の喜び、楽しみを実感できた。「交流」において1年生は、上級生にやさしく接してもらったうれしさ、安心感を得ることができた。

これら2つの視点の相乗的なかわりによって、新入学児童は安心感をもって学習に取り組み、教科学習の喜びや楽しみを味わうことができ、入学期における教科学習への円滑な移行に至った。

KEY WORDS

Start Curriculum スタートカリキュラム, Learning Exploration 学習探検, Studying Subjects 教科学習,
Nursery school and Primary school Cooperation 保小連携, Smooth-Transition 円滑な移行

1 はじめに

「小1プロブレム」という言葉が聞かれるようになったのは平成10年頃のことである。新保は「小1プロブレム」について「教師への反発から起こる『学級崩壊』とは違い、先生にかまってもらいたい、注目して欲しい欲求の表れ」としてとらえている。さらに、「小1プロブレム」が問題となった背景として、「子どもたちを取り巻く社会の変化」「親の子育ての変化と孤立化」「変わってきた就学前教育と変わらない学校教育の段差」「自己完結して連携のない就学前教育と学校教育」の4つの問題を指摘しており⁽¹⁾、以後、「小1プロブレム」が教育現場において大きな課題の一つになってきている。

東京学芸大学「小1プロブレム」研究推進プロジェクトが、平成19年度に「小1プロブレム」の全国的動向を把握するための調査を行った。それによると、全体の4割以上が過去や現在において「小1プロブレム」の発生を確認していることが報告されている。発生状況を見ると、特定の地域や学校において集中的に発生しているのではなく、各地域に発生している現状を推測している⁽²⁾。このことは「小1プロブレム」はどの学級にも起こりうる問題であることを示すものであるととらえることができる。

このような状況の中、「中央教育審議会答申」（平成20年1月 以下、中教審答申と略記）では、幼小連携について「幼児教育と小学校教育の接続については、幼児教育では、規範意識の確立などに向けた集団とのかかわりに関する内容や小学校低学年の各教科等の学習や生活の基盤となるような体験の充実が必要である。他方、小学校低学年では、幼児教育の成果を踏まえ、体験を重視しつつ、小学校生活への適応、基本的な生活習慣等の確立、教科等の学習への円滑な移行などが重要であり、いわゆる小1プロブレムが指摘される中、各教科の内容や指導における配慮のみならず、生活面での指導や家庭との十分な連携・協力が必要である。」⁽³⁾とあり、その重要性を指摘している。

この中教審答申を受けた、学習指導要領等の改訂における連携の記述について取り上げる。『幼稚園教育要領』（平成20年3月）では、特に留意する事項において「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。」が明記された⁽⁴⁾。また、『保育所保育指針』（平成20年3月）でも、小学校との連携に関する事項が新設された⁽⁵⁾。

『小学校学習指導要領』（平成20年3月）の総則では、家庭や地域との連携、小学校間、幼稚園や保育所、中学校

*上越教育大学（専門職学位課程） **学校教育学系

及び特別支援学校などとの連携や交流の機会を設けることについての記述がある(6)。「第2章 第5節 生活」では、第1学年入学当初において生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすることについての記述が見られる(7)。

『生活編』の幼児教育及び他教科との接続では、「幼児教育との接続の観点から、幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科等との関連を図る指導は引き続き重要であり、特に、学校生活への適応が図られるように、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善すること」と述べられ、初めてスタートカリキュラムという言葉が登場する。

以上のように、小1プロブレムなど学校生活への適応が難しい児童への対応として、保幼小連携にもとづいたスタートカリキュラムを含め、生活科への期待が大きくなってきていることが分かる。

一方、スタートカリキュラムが小学校への適応目的のみになってしまっている現状があると懸念の声も多く聞かれる。『生活編』では、「総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かすことが、小1プロブレムなどの問題を解決し、学校生活への適応を進めることになる(10)」と指摘する。また、木村は、園児が「これまで経験してきた『遊び』の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって『小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ』という自信が持てるきっかけになる。これが、スムーズな『適応』を生み出すというスタートカリキュラムの第一の意義である。(11)」と述べる。このように、園児が幼稚園や保育所で付けてきた力を小学校でも発揮できるようにカリキュラムを工夫していくことで、結果、「適応」につながっていくというスタートカリキュラム本来の意義を、改めて理解する必要がある。

本来の意義にもとづいたスタートカリキュラムの在り方を考えた場合、最も大切なのは積極的な保幼小連携を図り、幼児教育と小学校教育とのつながりのあるスタートカリキュラムとなるように工夫していくことであると考えられる。

2 AM小学校スタートカリキュラム

新潟県M市立AM小学校では、今年度から全校体制でスタートカリキュラムに取り組んでいる。そこでは、AM小学校に併設されたH保育園との保小連携に基づき、新入学児童の「適応」を促そうとしている。AM小学校は、昨年度から木村ゼミの学校支援対象である。以下、カリキュラムの紹介を行う。

2.1 計画表

表1 AM小学校スタートカリキュラム1週目
平成26年度 AM小学校 スタートカリキュラム
(4月7日~4月11日 第1週)

Table with 5 columns: 曜日 (Day), 月 (Month), 日 (Date), 内容 (Content), 担当 (Staff). Includes a detailed weekly schedule for the first week of the start curriculum, covering activities like orientation, school rules, and classroom activities.

表2 AM小学校スタートカリキュラム2週目
平成26年度 AM小学校 スタートカリキュラム
(4月14日~4月18日 第2週)

Table with 5 columns: 曜日 (Day), 月 (Month), 日 (Date), 内容 (Content), 担当 (Staff). Includes a detailed weekly schedule for the second week of the start curriculum, focusing on social skills, group activities, and subject introduction.

2. 2 AM小学校スタートカリキュラムにおける3つの視点と実践

H保育園とのつながりを重視して、3つの視点において具体的な実践を計画した。

表3 AM小学校スタートカリキュラムにおける3つの視点と実践

3つの視点	実践	実践の概要
<p>保育園と小学校の両方に同じ名前の実践を位置づける</p> <p>H保育園で経験したことをAM小学校生活にも取り入れることで、安心感や心のゆとり、学校生活への期待を大きくすることをねらいとした実践。</p>	<p>ブックタイム</p> <p>チャレンジタイム</p>	<p>アプローチカリキュラムとして毎週水曜日と金曜日、AM小学校が昼休みの時間帯に、H保育園児がAM小学校の図書室に行き、読み聞かせをしてもらったり、好きな本を見たりする時間をブックタイムとして設定した。このブックタイムを、スタートカリキュラムにも取り入れて、本に触れたり、図書室の使い方を学んだりした。</p> <p>AM小学校全校児童が13時35分から13時50分までの15分間、ランチルームで学習する時間に合わせて、H保育園児が時間と場所を共有し、粘土やお絵かきなど自分が取り組みたいものを選び活動する。H保育園では普段使用することが少ない机や椅子の環境に慣れ、15分間集中して活動できるようになることを目的とした。</p>
<p>主体性と協調性（共通目標）の育成をめざす実践を位置づける</p> <p>H保育園とAM小学校において共通理解された、めざす子ども像の一つである「主体性と協調性の育成」に視点として取り入れられた実践。</p>	<p>少人数指導型サポート活動</p> <p>1年生を迎える会</p>	<p>朝の準備（ランドセルの片付け、学習用具の準備、提出など）、給食準備、清掃活動を中心に、新入学児童にマンツーマンで手厚くお世話するのではなく、あくまで自分でできるようになることをめざして、上学年がグループでサポートする活動。サポートする6年生の成長も視野に入れた互恵的な活動となるよう計画した。</p> <p>アプローチカリキュラムで遊びを話し合いによって決定してきた経験を生かし、一般的に招待される側である1年生が全校で遊ぶゲームを担当する。1年生にも児童会の行事の役割の一つを担当することで達成感を味わわせることを目的とした。</p>
<p>「学び」と「交流」を目的とした実践を位置づける</p>	<p>学習探検</p>	<p>AM小学校はH保育園との併設の環境を生かし、交流活動を多く取り入れている。そこで、新入学児童の入学後、今まで行われてきたレクリエーション的な内容による他学年との交流活動を、教科学習の時間を使って行う。また、交流とともに、H保育園において大切にしている、発達段階に応じたその時の学びである「学びの芽生え」を、小学校からスタートする教科学習での「自覚的な学び」につなげていくことも目的とし、各学年と様々な教科で学習を行った。</p>

3 研究の目的

スタートカリキュラムを作成する際、幼児教育と小学校教育とのつながりを考えていく時に必要なことはどんなことであろうか。それは前述した「幼児教育の成果を小学校教育に生かすこと」であると考えられる。そのためには小学校、幼稚園、保育園の目標や運営方針、児童、園児の実態などについて、相互理解を図ることが必要である。木村は、「幼保小連携の鍵は、幼児教育と小学校教育について、それぞれの教師がお互いをよく知り、理解し合うことである。」⁽¹²⁾と述べる。連携によって得られた幼稚園、保育所の情報を、「幼児教育の成果を小学校教育に生かすこと」を視点としてスタートカリキュラムに生かしていくことは、小学校生活における新入学児童の自信につながっていくと考える。

そこで、本研究では、幼児教育とのつながりを意識し、幼児教育で付けた力を小学校教育で生かすことを視点に考えられたスタートカリキュラムの実践が、小学校における新入学児童の行動にどのように影響していくか検討することを目的とする。

4 研究の内容と方法

4. 1 調査対象と調査期間

本研究における調査対象と調査期間は、次の通りである。

調査対象：新潟県M市立AM小学校

調査期間：2014年4月

4. 2 調査方法

中教審答申において、幼保小連携における、教科等の学習への円滑な移行の重要性が述べられている。合科的・関

連的指導として、児童が幼児期に体験してきた遊びの要素と小学校生活の中心となる教科学習の要素を含んだ活動は多く実践され、幼児教育と小学校教育の円滑な接続への成果が報告されている。学習探検は、より教科学習の要素を多く取り入れた実践である。保育園において今まで身に付けてきた力を「学びの芽生え」としてとらえ、その力を小学校教育の中で「学びの自覚化」としてつなげて生かしていけるといった「学びの連続性」に視点を置いた実践である。教科学習の学びと他学年との交流を視点とし、スタートカリキュラムの主目的である緩やかな接続だけでなく、教科等の学習への円滑な移行への可能性を検証することにつながると考え、今回、学習探検の実践を取り上げることとする。

学習探検での児童の行動と発言の観察、振り返りでの発言をもとに場面分析を行った。また、保護者や職員を対象に実施したアンケートから、学習探検に関連した家庭での児童のつぶやきや様子をつかみ、考察につなげた。

5 実践と考察

5.1 2年生「算数」での学習探検（4月15日）

1年生は保育園の時に、普段の活動や生活経験の中で1から10ぐらいまでの数であれば数えられることが職員による情報交換により確認されていた。そこで、未学習の内容ではあるが、1から10までの数字を用いて活動することを検討し、学習探検の学習内容を立案した。学習内容は2年生の「1000までの数」。1年生と2年生がペアとなって活動した。1立方センチメートルのブロックを1年生が10個ずつまとめて2年生に渡し、2年生は10個のまとまりを集めて100個のまとまりを作った。その時の活動場面では、次のような様子が見られた。

【ブロックを数える場面】 1年生の様子

- T児：「1, 2, …10」とつぶやきながら数える。数えたらもう1回確認して数える。
- T児：数えたブロックをかためて机に並べ、2年生のI児に渡す。
- T児：6回目までぐちゃぐちゃにかためていたが、2年生のI児のまねをして縦2つ、横5つの形を作って並べたものをI児に渡すようになる。
- M児：2年生が10個のブロックを入れるために○を付けてくれた工作用紙に、2年生にかわって100のまとまりを完成させた。

1年生のT児は、ブロックを声に出しながら数え、10個のまとまりにしてペアの2年生I児に渡した。その後、2年生のI児が並べている縦2つ、横5つの形を見て、自分でもそのまとめ方をまねし始めた。活動を通して、ブロックをひとまとまりにしておくより、縦2つ、横5つの形にした方が数を確認しやすいということを2年生から学んだ姿と言える。合理的な方法を知り、その方法を用いて課題解決できたという喜びは、算数という教科への興味関心を高めていくことにつながっていくものと考え（写真1）。

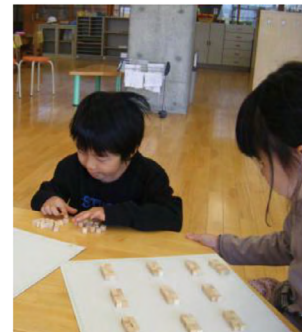


写真1 学習探検2年生との算数

【ブロックを数える場面】 2年生の様子

- R児：10個のブロックを入れるための場所として、工作用紙に○を付けてあげる。
- H児：ブロックが足りないと言っている1年生に渡してあげる。
- S児：足りないブロックを他のグループからもらってくるように指示を出す。

2年生の課題である100のまとまりを完成させることに取り組みながらも、1年生がブロックを数える様子を見守ったり、活動の指示を出したり、1年生の様子を気にかけての行動が見られる。R児は工作用紙の上に集めたブロックが混ざり合って数が分からなくなってしまうことに気付き、1年生が数えるときに10個ずつまとめて置けるように、工作用紙に丸をつけ、「ブロックを数えたら丸の中に入れるんだよ」と伝えた。活動後の振り返りにおいては、1年生もこの声かけがうれしかったと発言している。

職員のアンケートにおいて、「他学年の児童も1年生と一緒に活動することで、リーダー性や上学年の意識が芽生

えた。」という記述があった。1年生だけでなく、他学年の成長にもつながっていくという、学習探検での互恵的な側面であると考えられる。

最後に100のまとまりを集めて、2年生が数える場面では、1年生も自然に加わり、「100, 200・・・」と声を出して数える姿が見られた。中でも1年生のT児は、100のまとまりを指さし、体を動かしながら「100, 200・・・1000」とうれしそうに数える姿が見られた。入学後、T児が初めて見せた積極的な姿であった。

【活動終了後の1年生の振り返りの発言】(Tは担任)

T：気が付いたことがあったら教えてください。

I児：気が付いたこと？あった！

I児：背中ピンとしてなかった。①

R児：してたじゃん。②

K児：〇〇さんがしてなかった。

T：あとどうだった？

I児：よく聞けてた。③

T：お話よく聞けていたよねー

T：今日どうだった？難しかった？

I児：100こが難しかった。④

R児：100なんて簡単だったよ。

T：1年生何して下さいって言われた？100頼まれてないでしょ。

K児：え、10をする

T：そうだよね。10するって頼まれたんだよね。10はできたみんな？

I児：できた10！

T：最後にいくつが並んだか分かった？

M児：1000！

T：すごいよね。

【ペアでの気付きの交流を終え、最後の1年生の振り返りの発言】

K児：かっ手と手を挙げてたの。⑤

あとね300とか200とか言ってたよ。

ね、Tさん。

T：Tさん同じ？

T児：(うなずく)

M児：2年のRさんが丸をかいて、そこに10の塊をつくるんだよって教えてくれたのがうれしかった。⑥

T：みんな2年生どうだった？やさしかった？

M児：(うなずく)

1年生での振り返りでは、下線①②③⑤のように2年生の学習態度、姿勢に関する発言が多く出てきた。椅子に姿勢よく座って教師の話の聞き、手を挙げて発言するといった様子は、教科学習の基本スタイルであるが、保育園との大きな相違点の一つであり、1年生にとって印象に残る場面となったと考える。また、同時に小学校での教科学習の様子がつかめたことで、自分たちの学習の進め方の模範としていけることが考えられる。

下線④は、算数の教科特性に関する発言である。生活経験の中で聞いたことのある100という数字であったが、実際に数えてみることでブロックの多さを実感し、そのことが難しさとして表現されたものとする。下線⑥は、2年生との交流の視点での発言である。ペア活動を通して、2年生がやさしく接してくれたことが1年生の喜びとなっている。入学期に上級生と一緒に学習するという状況で、少なからず緊張感を感じている1年生にとって、上級生からの声かけ、活動のリードなど1年生を気遣ってくれる行動は、緊張感を軽減させることにもつながっていくものとする。

5. 2 1年生「算数」の教科学習スタートの様子(4月15日)

2年生との学習探検をおこなった同日の3時間目に、1年生の算数の学習が行われた。その時間の導入において、次のような様子が見られた。

【1年生初めての算数学習の導入における学習探検の振り返り】(Tは担任)

T：算数ってなににするんだろうね。

2時間目に2年生の算数見てきたよね。

どんなお勉強だった？

黒板に先生何書いてあった？

R児：1

T：あー1書いてあった。あとは

S児：計算問題

I児：9

T：すごい。良く見てたね。数って言うんだよね。

1と9の他に知っているのがある？

I児：3

K児：4

K児：5, 6

T児：6

続けて7, 8, 9, 10をK児, T児, I児で言う。

T：そういうのいっぱい黒板に書いてあったよね。

じゃあみんなは2年生と一緒に何したの？

K児：数数えた。

T児：いくつ数えたの？まねしてやってみて

K児：10こ

R児：40こ

T：小さい積み木全部でいくつあったんだっけ？

I児：1000こ？

T：1000こってすごいよね。ものすごい多いなあと先生思ったけどみんなどうだった？

K児：少なかった。

学習探検において、自分が目にした数字や数えた数字について積極的に発言する姿が見られた(写真2)。算数は計算や数字が出てくる学習であったことが、学習探検の振り返りを通して実感されていたと考えられる。自分たちも知っていた1から10ぐらいまでの比較的小さい数字が、2年生で学習する1000という数字につながっていくことを、体験を通して学んだことは、算数という教科学習への興味・関心の高まりにつながる一つの要因になったと考える。

導入後、算数の教科書にある動物探しを行った。絵の中にある動物を見つける活動であった。1年生児童は見つけたものを発表した。担任が発表の機会をとらえて、発表時に手を挙げることと立って話すことの2つの学習ルールを指導した。この2つのルールは、学習探検において2年生が見せていた姿であった。担任は2年生の発表の様子について「どうだった」と1年生に尋ねながら確認し、指導を行った。前述通り、子どもたちにとって2年生の発表場面は印象深く心に残っており、想起しやすい場面であったと考える。その後、1年生児童は、全員が積極的に元々よく手を挙げ、立って発言することができた。職員アンケートにおいても「上学年児童の学習の様子が模範となり、張り切って学習に取り組もうとする様子が見られた。」という記述が見られた。発表場面の様子を学習探検で見せてもらっていたことで、自分たちもあのように話せばいいんだということがイメージできたことが行動として表れていると推察できる。

このように、学習ルールを学ぶことは、教科学習を進めていく上での一つのスタイルを知ることとなり、「小学校の勉強はこんな風にやっているんだな」という安心感につながるとともに、教科学習への期待も大きくさせる一要因としてとらえることができる。



写真2 1年生「算数」教科学習初日

5. 3 4年生「国語」での学習探検（4月17日）

4年生の国語の物語文である「白いぼうし」の音読発表を聞く活動であった（写真3）。1年生が保育園の年長児のとき、アプローチカリキュラムで実施したブックタイムの影響で、12月ごろから読み聞かせへの興味・関心が高まり、保育士から毎日読み聞かせをしてもらっていた。お話を聞く経験をたくさんしてきたことを受け、今回の活動内容に決定した。4年生は3つのグループに分かれており、初めに音読発表のめあてを1グループずつ発表した。その後、グループごとの練習となり、1年生も3つに分かれて各グループのところへ行き、練習の様子を参観した。練習後、1グループずつ音読発表を行った。発表ごとに1年生に尋ねた感想では以下のような発言が出てきた。



写真3 1年生「国語」教科学習初日

【音読発表を聞いた後の1年生の感想（1）】（Tは担任）

1班

T：今の発表を聞いてどんなふうに感じましたか？

T：他にお話できる人いますか？

I児：（挙手）夏のお話ですか？①

T：どうですか？

4年生：いいです。

K児：（挙手）レモンのお話。②

T：どうですか？

4年生：近い。

I児：（挙手）夏ミカンのお話。③

4年生：いいです。

T：4年生は1年生のお話を聞いて思ったことはありますか？

4年生：みんな1場面の話をちゃんと分かっていてくれてよかったです。④

I児とK児は、下線①②③のように音読発表を聞きながら自分なりに聞き取った内容を伝えようとした。興味をもって話を聞くことは、国語の「話すこと・聞くこと」においても大切にされている内容である。2人の発言は、音読をしっかりと聞いていたことを表すものであり、この姿勢は、物語の内容をつかんだり、読み取ったりする力につながっていくと考える。しかし、発言児童が固定した様子が見られた。1年生のどれだけの児童が音読の内容を聞き取ることができていたか確認することができなかった。4年生は、下線④で音読を聞いてもらえたことへの喜びを話している。これは、学習探検における「交流」から得られたものであり、音読発表会という活動内容の互恵的な側面であると考えられる。

【音読発表を聞いた後の1年生の感想（2）】（Tは担任）

2班

T：1年生のみなさんにクイズを出したいと思います。

T：運転手の男の人の名前、分かる人はいますか？

Y児とI児が挙手

Y児：松井さんです。

2班の音読発表では、発表後、クイズ形式で1年生に物語の内容について尋ねた（写真4）。1班の時に発言しなかった児童が新たに挙手し、発言する姿が確認された。クイズ形式で答えやすかったことも要因の一つと考えられる。しかし、挙手したのは9人中2人であった。内容が聞き取れていないか、全体の前で挙手して発言することは緊張感が大きく、難易度が高いのが影響するものと考えられる。



写真4 音読発表後の感想発表

【音読発表を聞いた後の1年生の感想(3)】(Tは担任)

3班

T: 工夫をしたところはどこだったんですか?

4年生: 「よかったね、よかったよ」のところで3人で読んで、大きい声と小さい声で。

T: 1年生のみなさん。「よかったね、よかったよ」のところで3人で読んでいたの分かった人います?⑤

M児: 挙手

1班

T: 今の発表を聞いてどんなふうに感じましたか?

T: お話の中身が分かった人?

I児: 挙手

T: I児さん。何が分かった?

I児: いすに座っているのが、車に乗っているみたいだった。⑥

感想(3)は、4年生の音読の工夫について1年生の反応や発言である。M児は、発表者の近くで音読を聞いており、下線⑤にある3人で声を合わせて読む工夫に気付いていたようだが、そのことが、音読の工夫であることは4年生の話で気付いたと考えられる。I児は、4年生が椅子に座りながら音読していた場面を想起し、発言した。I児は音読の内容からタクシーに乗っている場面をイメージできており、椅子に座っている様子と併せて下線⑥のように発言したと考える。

音読の楽しさの一つでもある、音読の工夫を新たに知ることは、自分にもできそうだと、やってみたいという思いを強くし、音読への興味関心の高まり、国語の学習への期待につながっていくものとする。

【活動終了後のペア交流場面での1年生の振り返りの発言】(Tは担任)

I児 お話しするのがすごかった。⑦M児 本を読むのが上手。⑧I児 車を工夫したところがすごい。M児 車の感じがした。ダンボールなしでもいすだけでやっていた。

【ペアでの気づきの交流を終え、最後の1年生の振り返りの発言】

T: 国語って何をやる勉強だと思った?

K児: 本を読む勉強をしていた。⑨I児: 字が上手だった。K児: 見た! 黒板に書いてた。I児: 車を工夫していた。S児: 長いお話を読んでいた。すごい。⑩

音読発表会であったことから、1年生児童からは下線⑦⑧⑨⑩のように、4年生が読むことが上手であったことへの発言が多く聞かれた。国語は読む勉強をするものだという一つのイメージができたものとする。一方で、音読した「白いぼうし」の内容に関する発言はなかった。直接見たり、聞いたりしたことが印象として残ったようであった。

音読発表会での学習探検は、1年生にとっては参観することが中心となり、「交流」の視点での発言が少なかった。一方で、音読の模範からうまさや工夫を学び、音読への意欲を高める一要因となったと考える。話の内容を聞き取らせるためには、児童の発達段階も考慮し、場面の挿絵を見せるなど場面をイメージしやすくする工夫が必要であるとする。

5. 4 1年生「国語」の教科学習スタートの様子(4月17日)

4年生との学習探検をおこなった同日の3時間目に、1年生の国語の学習が行われた(写真5)。教科書の「はる」の詩の音読であった。初めは座ったままで、先生の後に続いて音読した。その後、自分たちで間をとりながら音読できるようになり、担任が「4年生のように立って読んでみよっか」と投げかけるとT児が「えー」と疑問の声を出した。これは「4年生のように音読できるだろうか」というものであった。実際、この後、教科書を持ち、全員で立って音読することができたが、最後に担任の「みんなの前で4年生みたいに読んでくれる人」の投げかけに、T児は挙手して音読を行った。T児は学習探検時から振り返りに関して積極的に発言していた児童の一人であった。4年

生の音読発表会の様子を参観し、音読への興味・関心は高まっていたと想像できる。全員で音読した後、自分なりに音読できたことが自信となり、その後の行動に結びついたと考える。その後、F児、M児と二人の児童が挙手し、音読を披露した。F児においては、緊張しやすい性格で、普段はおとなしく、自分から手を挙げて発言する機会の少ない児童であった。みんなの前で堂々と音読することができ、大きな拍手をもらった。

学習探検において音読の様子を参観したことを受け、1年生の国語の教科学習スタートに音読を取り入れて活動したことにより、2つの時間の学習内容につながりが生まれ、スムーズに国語の学習に入っていくことができた。学習探検では発言がなかったF児が、1年生の前で、一人で音読するという緊張が伴う活動に積極的に挑戦できたのは、学習探検を通して、自分も4年生のように音読してみたいという意欲、あこがれが影響していたことが推察される。また、学習探検と国語学習のスタートを同日に位置付けたことは、学習探検で高まった気持ちをすぐに自分たちの学習につなげることができ、教科学習への期待の高まりに大きな効果が得られた。



写真5 1年生「国語」教科学習初日
音読の様子

6 成果と課題

保小の情報交換による園児の実態把握をもとに計画された学習探検では、「学び」と「交流」の2つの視点においてその効果が確認できた。

教科学習での学びにおいて、課題解決は必要不可欠なものである。2年生との算数の学習探検では、1年生はブロックを10個ずつ数えるという明確な課題があった。間違えずに声に出しながら数え、課題を解決していくことは自信となった。また、グループの2年生と協力して100個のまとまりをつくるという活動では、課題解決とともに、協同的に学ぶ楽しさも味わうことができた。もう一つ、4年生との国語の学習探検のように、学習の様子を参観することから、国語という教科の学習内容、学習規律やルールなど教科学習の様子を知ることができた。そのことは、教科学習への意欲を高めたり、1年生なりの見通しをもてたことから、安心感へとつなげたりしていた。交流では、上級生にやさしくしてもらった、分からないところを教えてもらったという喜びや、支えてもらえるという安心感を得ることができた。学びと交流の2つの場面において得られたものが、相乗的にかかわることで、さらに教科学習への段差は緩やかなものになったのではないかと考える。

入学期において、新入学児童と他学年との交流は一般的にレクリエーション的なものが多い。みんなが楽しく参加できる一方で上級生も活動に夢中になり、新入学児童との関係性が構築しにくくなるという点もある。学習探検のように、教科学習の場面は系統的なものであることから、教える側、教えてもらう側がはっきりし、学年間関係が構築しやすいという利点も確認できた。

なお、今回は一つの学年につき、1教科を選択し、実践を行った。どの学年において、どの教科でどんな学習内容で実践を進めていくことが教科学習への円滑な移行に、より効果的であるか検証が求められる。

参考・引用文献

- (1) 新保真紀子「『小1プロブレムに挑戦する』」明治図書、2006、p.110.
- (2) 東京学芸大学 小1プロブレム研究推進プロジェクト「小1プロブレムと幼小連携に関する調査」2007.
- (3) 文部科学省「中央教育審議会答申」2008
- (4) 文部科学省『幼稚園教育要領』2008、p.12.
- (5) 厚生労働省『保育所保育指針』2008
- (6) 文部科学省『小学校学習指導要領』2008
- (7) 前掲(6)、p.73.
- (8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』2008
- (9) 前掲(8)、p.7.
- (10) 前掲(8)、p.45.
- (11) 木村吉彦『生活科の理論と実践』日本文教出版、2012、p.86.
- (12) 前掲(11)、pp.74-75

The Importance of “Learning Exploration” in the Start Curriculum

Masaki FUTAGAMI* · Yoshihiko KIMURA**

ABSTRACT

This study focuses on “learning exploration” as a practice of the start curriculum which puts an aspect on children’s smooth transition to studying subjects at elementary school in consideration of their achievements in primary education. In this study, We have clarified the effect of “learning exploration” from two viewpoints of “learning” and “exchange” through the observation of new first graders. We observed them in a math class with second graders and a Japanese class with fourth graders. In terms of learning, they were taught learning attitude and learning discipline from senior students. They took part in activities with their personal goals in mind and felt happy and pleased with studying subjects through pursuing them. In terms of exchange, they felt kindness of their seniors and a sense of relief.

The multiple relationship of these two viewpoints encouraged the new first graders to take part in their learning activities with a sense of relief and made them happy and pleased, which led to the smooth transition to studying subjects at the beginning of their school life.